

芸豪烈伝その7

あおい
は
葵わか葉

剛と柔が溶けあう二人三脚の

浪曲人生

写真・森 幸一 文・おさだ衛



あおい・わかば 本名は米川ヤスエ。長崎県出身。16歳で大阪の大隅輝子に入門。「大師匠」の広沢光子からも芸だけでなく「布団の綿入れまで教えられました。人目につくところでは必ず正装しなさいとも」。結婚するまで「ひとりで喫茶店に入ったことがなかった」箱入り娘。「浪曲師でなく本当は和裁で身を立てたかった」。

浪曲は新興の語り芸で女性の大家が多い。実力が努力をすればスターになれる可能性は、男性よりも大きいといえよう。

30年のキャリアでもこの世界では、まだ新進だ。天性の美貌と美音を誇る葵わか葉は次代の浪曲界を背負って立つ急先鋒として自覚に燃えている。

女性ゆえの、美貌ゆえの悩みがある。

「浪曲大会の私の高座がテレビで放送されるのを見ると、イヤになるときがあるんです」

高い声をだすときに首を伸ばしたり身をよじる自分の姿が、みにくく見えて耐えられないというのだ。

「顔がアップになると、もう絶望的な気分になります」

取材している私は40歳すぎのオシャレには無関心の朴念仁だが、わか葉師は違う。顔のシワ、それが1ミリの深さでもマリアナ海溝のように、1ミリ四方のシミでもゴビ砂漠のような広さに感じてしまうのだ。

「テレビのときはディレクターの人にアラが見えないようにと、お願いしているんですが」

なるほど、女流には男性とは、また違うハンデイがあるんですね。

わか葉師の高音は美しく遠くに響きわたる。木馬亭の高座から地下鉄浅草駅まで届きそうな勢いと力がある。

代表作の演題は「恋の田原坂」「誉れの名刀」「野猿の囃」「千代という女ありけり」などと数多いが、

「でもね、私は不器用なので十八番といえるネタがありません。これが葵わか葉だという決定版を作らないといけないと思っています」

昭和43年、それまでの地方まわりを



JR大塚駅ちかくの天祖寺、「夫婦銀杏」の前で。「私よりも米川さんの演しものが、いいと思うんですよ」と、わか葉。「現・玉川勝太郎と私は浪曲の入門は同時期です」と米川。花も嵐も踏み越えて来た二人のキズナは堅い。

やめて東京進出を果たしたさいに心機一転を期して「過去のネタ」を封印した。「雪の夜話」「安兵衛婚入り」、「野狐三次」の三席などだが、これらは、わか葉師が大阪で修行していたときの演題だ。貴重な関西ネタを復活させてほしい。

背筋をピンと張って話をする態度は女性の成熟と同時に、芸道を究めようとする求道者の厳しさも感じさせる。

「私は曲がったことが嫌いで、片意地なんでしょうね」

「貧乏はしても心にいつも花一輪は添えておきたいんです」

芸の神に仕える使徒のような敬虔さとひたむきさが、うかがえる。

「お客さんの前で演じる興行期間は夫婦のまじわりも、けがれるような気が

して、そういうことはしないのです」

わか葉師を語るときに欠かすことができないのが、夫の米川宏だ。

「米川さんは血みどろで、私のためにいろいろと尽くしてくれました」

わか葉師は夫ながら一歩でも「家の外」に出たら第三者とみなして「米川さん」と呼ぶ。

昭和39年、わか葉師が22歳、米川宏師がそのひとまわり上で、結婚して31年。ひとり娘はいま18歳だ。

米川宏師は現役の身を一時しりぞいで、わか葉師のためにマネジャー兼付き人として奮闘したこともある。

「彼女は声量があるし、舞台にも華があるけど、社交が下手なんでね。私が裏から支えてあげようと思って」と、米川師。

米川師はいまでも木馬亭の高座を努める巧者だ。浪曲の名人の節真似がうまい。先代・東家浦太郎の節真似での「桶屋奉行」、天光軒満月のネタ「父の秘密」など、深刻さとユーモアを交えた軽いタツチの節の運びは、私は高く評価したい。

裏方としての困難は数えきれないほどあったようだ。

「屈辱的なことがあっても、いちいち腹を立ててはいられませんでしたね。

巡業で赤ん坊をおぶって彼女のテール掛けを換えていたら客席から「いよつ、板割りの浅太郎」なんて声もか



「つい最近ですよ、私は私でやってみようと思いをしたの。寝ても覚めても浪曲の工夫を考えています。声でいうと、浪曲は一席に3回はお客さんを驚かさず声がないと、いけませんね」

「けられました」と米川師は苦労はかみしめても、外には出さない。

わか葉師は「私の気持ちちが不安定なときも、米川さんがいつも穏やかに話をしてくれたから、私は落ちつきましたね」

米川師の鬱憤ばらしはギャンブルで、わか葉師によると「あれで家の一軒は買えましたね」

わか葉師自身はギャンブルをするのかと問うと「ひとさまのお金を、たとえ遊びでも、いただくわけにはいきません」

わか葉師の剛と、米川師の柔がほどよく溶け合って取材した喫茶店はなごやかな雰囲気になった。

人という字は支えあう。夫婦が協力しあって生きる浪曲人生。わか葉師の浪曲の「若葉」がみずみずしく輝くのはこれからだ。

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと思います。

浪曲家の皆さん…頑張ってください。
多くのファンを楽しませて下さい。

7/52

葛飾区・坂本豊吉